

# チェルノブイリ通信

<http://www.cher9.org/>

NPO法人  
チェルノブイリ医療支援ネットワーク  
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-11-5F  
TEL/FAX: 092-260-3989  
E-mail: jim@cher9.org



チェルノブイリ医療支援ネットワーク (CMN) は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.

115

## 特集 ロシア語医療通訳 故 山田英雄さんを悼む

CONTENTS 医療支援に不可欠の存在。その出会いと思い出 / ベラルーシからのお悔みのメッセージ / 思いを受け継いで ～山田英雄さんを偲んで～ / コラム ベラルーシの一日 / 次号掲載予告：ベラルーシの医療専門家による来日講演会 / 支援者のお名前とメッセージ



2018年5月、ベラルーシから心理カウンセラーのリュドミラ・ウクラインカさん（右）を招いての講演会後の懇親会にて

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？  
ご寄付を受け付けています。

郵便振替口座	01770-1-65328
	他の金融機関からは 一七九支店 (当) 65328
楽天銀行	ジャズ支店 (支店番号201) (普) 7017104
住信SBIネット銀行	法人第一支店 (支店番号106) (普) 1030416
※口座名はいずれも「NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」	

●特集● ロシア語医療通訳 故山田英雄さんを悼む

# 医療支援に不可欠の存在。その出会いと思い出

チエルノブイリ医療支援ネットワーク(CMN)の活動に関わるすべての人々とつて、とても悲しいお知らせがあります。これまで長年、活動の中心的存在の一人であり、常に私たちを引つ張っていただいたロシア語医療通訳コーディネーターの山田英雄さんが、5月21日、多臓器不全のため急逝されました。72歳でした。

山田さんは、1997年の医療支援開始から現在まですべてのベラルーシ訪問に同行し、現地関係者との橋渡し役として力を尽くして下さいました。チエルノブイリ医療支援ネットワークの現在の姿があるのは、山田さんの存在を抜きにして考えることはできません。

これまでの山田さんとの思い出を振り返ってみたいと思います。

河上雅夫／CMN理事

## ■山田英雄さんとの出会い

私が山田さんと初めて会ったのは、1996年11月。外務省を通じて、当時の大阪大学医学部放射線基礎医学講座の野村大成教授より、大阪府で開催された公開講演会に招待された際でした。講演会には、ベラルーシから非常事態兼チエルノブイリ事故担当省の次官と、遺伝学・細胞学研究所の研究員も招聘されており、その通訳として山田さんが出席されていました。なかなか印象の強い方だったのを覚えています。

その頃、チエルノブイリ医療支援ネット

ワーク(当時はチエルノブイリ支援運動・九州)では、現地の市民グループと共同経営していた保養施設「サナトリウム九州」運営を終えて、次の支援の方向性を探っていました。また、日本とは大きく異なる現地の政治社会状況、子どもの甲状腺がんの急増、全体的な医療技術の遅れや、都市部と被災地の医療格差などの課題も見えてきていました。

そこで、すでにチエルノブイリ被災地に何度も足を運んでいた、山田さんや武市宣雄医師(武市クリニック院長)らの助言を受





2000年、ストーリン第8回検診。日本医科大学の清水医師らとの現地訪問。  
当時は数日間の検診で80名前後の患者を診ていた

け、甲状腺がんの特化し、日本と現地の専門家と連携した本格的な医療支援に取り組むことになりました。小さな一市民団体としても、大きな挑戦でした。以降、山田さんは活動に深く関わる、欠かせない存在になりました。

### ■現地での活動と的確な助言

1997年から始まった甲状腺がんの移動検診プロジェクトは、1月に調査のためのベラルーシ訪問、4月にラリサ・ダニーロバ

教授を招聘した募金キャンペーン、7月に第1回医療検診団派遣と続き、その後プレスト州ストーリン地区での移動検診が始まりました。私も、1998年と2000年の検診団派遣に参加しました。

当時、山田さんは1週間ほど早くベラルーシに入り、関係機関との打ち合わせや事前準備を行ってから、日本からの検診団をミンスクで出迎えていました。大量の支援物資や医療機器を持ち込むため、事前にベラルーシ政府から人道支援物資として公的な免税手続きを受けていても、ミンスク空港税関での入国時では、山田さんが多くの手間と時間を割いて対応しなければなりません。検診終了後も、山田さんは私たちを送り出してから帰国するの、かなりの日数ベラルーシに滞在することになります。大きな負担だったと思いますが、山田さんの移動検診に対する思いは人一倍強いものでした。

私にとって12年ぶりとなった2012年のベラルーシ訪問は、山田さんにとってはかなり大変だったようです。直前にボルゴグロードで別の通訳の仕事が入り、ロシアから一旦帰国してとんぼ返りでのベラルーシ訪問でした。事前準備や現地医療関係者との調整に直前まで追われ、さらに体調

不良が重なっていました。特に難聴で片側の耳はほとんど聞こえていないようでした。しかし、現地では何も言わずに仕事をこなさんから聞いたのは、帰国後のことでした。

2013年の訪問は、山田さんとベラルーシ関係者との信頼関係の強さを知る機会になりました。当初ゴメリ州も訪問する予定でしたが、ベラルーシ側の事情により、出発直前にゴメリを訪問できないことが分かりました。山田さんに、急ぎベラルーシ赤十字との間で協議と調整を依頼し、代わりの訪問先に決まったのが同じく汚染州であるモギリョフ州でした。

ベラルーシ赤十字本部からの連絡を受け、対応していただいたのはベラルーシ赤十字モギリョフ州支部でした。急に訪問が決まったにも関わらず、被災者の現状や医療体制の現状、被災者支援制度や課題などについて詳しく情報提供していただき、現地の診療所視察なども手配して下さいました。そのおかげで、プレスト州とは異なる被災地の最新の状況について把握でき、活動の上での貴重な参考情報となっただけでなく、ホテルの手配や、訪問先のクリモビツチ市市長表敬訪問まできめ細やかな受入れ対応をしていただきました。このような

迅速な対応も、山田さんとベラ  
ルーシ赤十字との長年の信頼関  
係があつてこそだったと思います。

この頃になると、移動検診の取り  
組み開始から15年が経過し、ベラ  
ルーシでの甲状腺検診技術が大き  
く向上したことから、私たちの支  
援活動の内容も一部見直しの必要  
性が出てきました。当初から「甲状

腺がんの早期診断・治療の確立」を  
目指してきたので、検診や診断技  
術と合わせて、治療を底上げる  
ための一つとして、甲状腺内視鏡  
手術を現地に導入する支援活動  
に取り組むことになりました。山  
田さんの助言と、現地側医療関係

者や清水一雄医師(当時の日本医  
科大学外科部教授)らによる協力  
申し出によるものでした。

数年ごとに訪れる現地の状況変  
化と、それに対応した支援内容の  
見直しにおいても、山田さんの存  
在は大きなものでした。

### ■強い絆で結ばれて

私は仕事の関係から東京、北陸  
方面で長く暮らしていたため、東  
京のカタログハウス本社で開催さ  
れていたチェルノブイリ関係団体  
の連絡会議へ、チェルノブイリ医療  
支援ネットワークを代表して出  
席する機会が度々ありました。

山田さんもこの会議には毎  
回出席されていましたが、山  
田さん自身は広島の放射線  
被曝者医療国際協力推進協  
議会(HICARE)や赤十  
字、ジュノーの会やヒロシマ・セ  
ミパラチンスク・プロジェクトな  
どもにも関わられていました。  
必ずしも私たちの団体だけ  
の関係者ではありませんでした  
が、会議の場では、ともに

2013年のベラルーシ訪問。急きよ訪問したモギリヨフ州では、現地の状況や支援制度について  
情報を得ることができた。山田さんは調査後もベラルーシに残り、医療チームに合流、同行した



現地の様子を伝え、支援のあり  
方について情報共有や提案をし  
てきました。それだけ、チェルノ  
ブイリ医療支援ネットワークとの  
絆は特に強いものでした。

2001年にチェルノブイリ原発  
事故15年に合わせ開かれたベラ  
ルーシ大使館でのレセプション、2  
013年に社会貢献支援財団社  
会貢献者を受賞した際の表彰式  
など、国内行事にもよく山田さ  
んと一緒に参加したという印象  
があり、理事の中でも特に親しく  
していただいたと思います。個人  
的にも、パソコンの調子がおかしい  
とかスマホの使い方がわからない  
時などは、時間帯にかかわらず

よく質問の電話がかかってくる  
ました。最近は少なくなってきた  
いましたが、今後はもうそうした  
電話もないのかと思うと、さらに  
寂しくなります。

これまでの活動への支援、チェル  
ノブイリ被災者をいつも一番に  
思い、力を尽くして下さったこと  
に深く感謝するとともに、山田  
英雄さんのご冥福を心よりお祈  
りいたします。



2012年のベラルーシ訪問。甲状腺がん検診の場でも、それ以  
外の場でも、山田さんの存在は大きかった

## ベラルーシ赤十字より

## お悔やみの手紙

ベラルーシ赤十字を代表しまして、医療通訳、コーディネーターとして活躍されていた山田さんをなくしたチェルノブイリ医療支援ネットワークへ心からお悔やみ申し上げます。

山田さんは、チェルノブイリ事故との「架け橋」として、ベラルーシの多くの人々にも大きな影響を与えてくれました。また彼はチェルノブイリ医療支援ネットワークと、また国境を越えてベラルーシで多くの人々への医療支援を行うことでご縁を繋いでくれました。

何年にもわたり、山田さんはベラルーシ赤十字の良き友でありました。彼がもう居ない、ということはとても受け入れがたいですが、永遠に我々の心に居てくれることでしょう。

私たちは、この心優しく活発で、親しみがあり、勤勉で楽観的な山田さんとの思い出を大切にしていきます。友であり、家族であるような山田さんへ、心からお悔やみ申し上げます。

Olga mychko

(ベラルーシ赤十字・オリガ総裁)



## アルツール医師、ウラジーミル医師、マキシム医師より

20年以上にわたって山田さんという素晴らしい方と医療支援の仕事をしてきました。この20年間に山田さんがしてくださった支援は欠かせないものでした。医療専門家の勉強のために日本のドクターを連れてきてくださったり、ベラルーシと日本の医療専門家のコミュニケーションをサポートしてくれました。医療支援がこのように長く続けられたことは山田さんの協力のおかげです。

チェルノブイリ原発事故で苦しんでいるベラルーシ国民を助けるため、医療器具や設備を寄付していただけたのも山田さんの努力のおかげです。

この仕事を一緒にしているうちに、我々は良い仲間になりました。優しく、気が利いて、頭が良くて、何があってもすぐ助けてくれる、何があってもプラス思考で、大丈夫、大丈夫と励ましてくれました。我々にとって山田さんは素晴らしい人で、憧れの人でした。

大親友を亡くした悲しみは深すぎ、心の痛みが増していくばかりです。父親みたいな支えがこれからはなくなると思うと切なくてたまりません。

しかし、山田さんの明るいオーラは永遠に我々の心の中にあります。

ご家族の皆さま、心からお悔やみを申し上げます。

2019年5月22日

アルツール・グリゴロビッチ、ウラジーミル・シヴダ（ブレスト州立内分泌診療所）

マキシム・ルシク（ベラルーシ共和国立卒後教育医学アカデミー）



# 思いを受け継いで

〜山田英雄さんを偲んで〜



## ■素顔の山田さん

大きな顔に大きな体格。鬼瓦のよ

うな強面に、ずけずけとした遠慮のないもの言  
い。話は長く脇道にそれがちで、初対面ではたじ  
ろいになってしまうけれど、実は、カメラをこよなく愛  
し、映画や歴史や芸術にも明るく、お茶目で甘  
党で大の子ども好き。情に厚く、困った人を見る  
と放っておけない人の良さと懐の深さ。山田英雄  
さんは、そんな人物でした。

広島市中心部で、靴屋の次男として生まれた  
山田さん。母は原爆投下を経験し、幼い兄は爆  
風で死亡。戦後生まれの自身も被ばく2世でし  
た。高校卒業後の1968年、社会主義への憧れ  
と、原爆の後遺症で苦しむ母を助けたい思いか  
ら、旧ソ連のハトリス・ムルンバ民族友好大学医学  
部へと進学。苦勞してロシア語と医学の専門知識  
を学び、ロシアの医師免許を取得し、現地女性と  
結婚されましたが、管理国家と社会主義の現実  
に失望して一緒に帰国。二人の娘を育てながら、  
広島でロシア語通訳や翻訳、家業の手伝いをされ

ていました。

そこへ1986年、チェルノブイリ原発事故が起  
き、その後の山田さんの人生は大きく変わること  
になりました。

## ■チェルノブイリと山田さんの関わり

1990年頃、当時の朝日厚生文化事業団  
や日本赤十字、笹川財団などが、医療機器や  
物資の支援、日本での転地保養や専門家の研修  
受入れなどによる、チェルノブイリ支援を始めま  
した。ロシア語で医療専門用語の分かる山田さん  
は、通訳・コーディネーターとして、医師や調査  
団派遣、マスコミ取材などに度々同行されまし  
た。

1992年頃になると、小児甲状腺がん急増の  
報告が相次ぎ、現地から国際社会へ移動検診プ  
ロジェクト支援の要請が出されるようになりまし  
た。残念ながらその頃、日本の大手財団等による  
大々的なチェルノブイリ支援キャンペーンはひと  
区切りつき、ほとんどが終焉に向かっていました。  
1990年前後に各地に生まれていたチェルノブ  
イリ支援市民団体も、日本への転地保養や物資  
支援が中心で、小児甲状腺がんに着目して医療  
支援をしている団体はありませんでした。

山田さんは何度も現地訪問を重ね、汚染地の  
状況をより詳しく知るようになっていました。医

療技術の遅れ、首都と地方である被災地との医  
療格差、広大な国土に被ばく者が点在している  
など、被災者をめぐる課題が分かり始めた山田  
さんや広島島の甲状腺専門医は、移動検診と被災  
地の医療技術向上が最重要という思いを日々強  
くされていました。

チェルノブイリ医療支援ネットワークが山田さ  
んと出会ったのは、ちょうど山田さんたちが、思  
いに共感し、ともに被災者を支えてくれる人た  
ちや団体を探していた時期でした。



1997年から山田さんと専門家とともに始めた甲状腺がん医療支援は、22年目を迎え、当初の予想以上の成果につながってきています。志高イブレスト州の国際赤十字移動検診プロジェクトチームと連携できたことで、さらに追い風になりました。

ベラルーシの現場では、専門用語が飛び交い、旧ソ連独特の人間関係や付き合い方、ものごとの進め方もあって、通訳・コーディネーターの山田さんに大きなストレスが集中します。年齢を重ねてからは特に、一日の予定を終えた夜にはクタクタになり、「今日はもう先に休むから」と一人先にホテルの部屋に帰られることもありました。

### ■ 思いを未来へとつないで

日本とベラルーシの狭間で、時に苛立ち、時に泣かされたり喜んだり。粘り強く、小さな希望を丁寧につなぎながら、モデルケースのないチェルノブイリ被災者支援の世界に確かな足跡を残すことに力を尽くされた、この30年だったと思います。チェルノブイリや旧ソ連に暮らす人びとへの思いは誰よりも熱く、核の「平和利用」への疑問や核被災者を救いたいという情熱の炎は、最後まで燃え続けました。

福島第一原発事故が起きて以降は、今度は私たちがチェルノブイリに学ぶ時期だと繰り返さ

れ、ブレスト州の第一線の専門家や医療機関と福島を結び、息の長い連携へとつなげていこうと一緒に取り組み始めたところでした。山田さんが亡くなられた日も、当初は、チェルノブイリ医療支援ネットワークの招聘で来日していたベラルーシの医師らによる福島での講演会に通訳として参加いただく予定でした。

大切な人を失った悲しみと寂しさは癒えず、ベラルーシや日本での山田さんとの数々の思い出がよみがえります。急に消えてしまった大きな存在は、簡単には埋められません、それでも残された思いを未来へと受け継いで、会員のみなさんと共に「まだ」33年しか経っていないチェルノブイリ被災地を支え、また、フクシマへとつないでいけたらと思います。

山田英雄さん、ありがとうございました。どうぞ安らかに、私たちとチェルノブイリを見守って下さい。また遠い遠い先で会えると信じ、心からご冥福をお祈りします。

寺嶋悠(CMN理事)



## 【お知らせ】 中国新聞 ヒロシマ平和メディアセンター 社説・コラム

チェルノブイリ原発事故から20年後の被災地取材するため、山田さんと現地を訪問された中国新聞の滝川裕樹記者による追悼コラムが同社サイトに掲載されています。どうぞご一読ください。

(「中国新聞 山田英雄」で検索)

日本語版

<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=91185>

ロシア語版

<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=91440>



## 東日本大震災から8年

2019年3月11日、東日本大震災から今年で8年が経ちました。これにより発生した福島第一原子力発電所の事故のことはベラルーシでも知られています。チェルノブイリの悲劇で放射能被害と闘ってきた現地の人達は、日本で起きた同様の事故について今なにを思うのでしょうか？その3月11日、ミンスクにある《仙台公園》を通りかかる現地の人々に福島での事故のことについて語ってもらいました。



### アナスタシアさん

(女性、20歳、ミンスク出身、マネージメントを専攻する学生)  
 チェルノブイリの被害を知っている私達にとって福島の事故はとてもショックなものでした。日本のことはとても好きで、文化を学びアニメにも夢になりました。放射能が消えるということはなく、400年もの間のこるとも言われています。それを汚染地域から完全に除去することは難しいかもしれません。



### エレナさん

(女性、40代、ミンスク出身、放射線分野で働く医師)  
 (福島原発事故は) 本当に悲惨で恐ろしい事故で、今も結束して立派に困難に立ち向かう日本の方々には同情しています。何らかの汚染影響は残っているかもしれませんが、日本の人々ならこの問題をきっと解決できると信じています。かつて私達がチェルノブイリ事故後の被害を克服してきたように。多くの汚染地域での放射線量もそこまで大きくはなっていないと聞いています。津波などの被害で受けた住民の精神的なダメージもケアすることも大事ですし、人々が安心を得るための時間が必要だと思います。



### タマーラさん

(女性、61歳、ゴメリ州スベトラゴールスク出身、年金生活者)  
 福島の事故で被害に遭われた方々に同情の意を表します。私達も1986年に同様の事故を経験しましたが、日本でのそれはより深刻なのかもしれません。発生した場所が海のそばで水が関係しているからです。世界の歴史を見ても大きな悲劇の1ページとなりうる事故であり、この知らせを聞いた時は心を痛めました。ロシアやベラルーシも復興支援をしました。被害を克服してくれることを願うばかりです！



### チムールさん

(男性、30歳、ミンスク出身、障害年金生活者)  
 福島で起きてしまったことは悲しい事故です。近辺の被害がどれほどのものだったかは分かりませんが、チェルノブイリ事故後のプリピャチのように戻れない地域もあるようです。私達の国でも放射能の被害に苦しむ人々がいました。私のようにチェルノブイリ事故直後に生まれた世代には、甲状腺の症状など健康への影響がありました。どうしようもない状況でした。



### ジグモンドさん

(男性、85歳、プレスト州バラナヴィッチ出身、年金生活者で元エンジニア)  
 私は日本の技術力の高さを確信していますが、福島原子力発電所の作動を止めた津波の大きさは想像を絶するものがあったと思います。私もソビエト時代に4か所の原子力発電所にいた経験がありますが、それは責任重大なものです。ベラルーシでも建設が進んでいますが、各原子力発電所は地震など全ての自然災害に備える必要があります。

## 33年目のチェルノブイリ

2019年4月26日、チェルノブイリ原発事故から33年が経過しました。当時、最も放射能汚染の被害を受けたベラルーシ共和国では、チェルノブイリ事故のことがどのように思い返されるのでしょうか？

首都ミンスクのある聖シモン・聖エレナ教会。このカトリック教会の敷地内には平和への願いが込められた「長崎の鐘」が建てられており（※右下写真）、その下には放射能被害を被った広島・長崎・福島が土が入ったカプセルが埋められています。教会を訪れる人々に33年前に起きた事故のことを振り返ってもらいました。

### ロシアからの旅行者、チェルノフご夫妻 オレグさん

（ウリヤノフスク州出身、年金生活者、元技師・設計者）



チェルノブイリ事故は、私個人にとっても、全ての人にとっても大きな出来事でした。この悲劇を忘れないことが重要で、若い世代には環境を大切にしてほしいと思います。電力の使用を抑えて、こういった環境に影響を及ぼす発電所を建設しなくても大丈夫な自然エネルギーの開発を期待しています。どのような目的であれ、原子力エネルギーが地球上に存在するのは望ましくありません。どうしても必要な場合は絶対的な安全性が保障される高度な技術が求められます。安全な原子力発電所の設計は現在に至っても切実な問題で、二度とあのような悲劇が世界で起きないようにすることが大事です。

### タマーラさん

現在も私達が住んでいるウリヤノフスク州では事故の被害が比較的ひどくはありませんでしたが、ベラルーシを含め汚染地域のことを思うと胸が痛みました。とても恐ろしく悲しい出来事でした。日本の福島でも起きた同様の出来事もテレビで見ましたが、汚染地域を完全に復興させるのには長い年月と莫大な費用がかかるのではないかと心配しています。それを思うと、平和目的であったとしても原子力エネルギーの開発はできるだけ避けた方がいいように思います。



### クセーニヤ・スタセーヴィッチさん

（女性、30歳、ミンスク出身、マーケティング担当者）

チェルノブイリ原発事故というのは、私達にとって本当に恐ろしい出来事でした。事故後すぐに消火活動にあたった方々、汚染地域に住む多くの人々が放射能の影響で亡くなりました。事故後に生まれた世代も含めて、ベラルーシ人の間で発生するがんや多くの病気は残存している放射能と関係なくはありません。被害の進行を食い止めるには必要な情報をいち早く伝えていくことも大事になってきます。

同様の事故が起きた日本の方々とは経験を分かち合い、このような悲劇が起きないようにしていくことが大切だと思います。被災地の人々の健康を願うばかりです。



チェルノブイリ事故後に生まれたクセーニヤさんですが、被害の歴史を把握しており、それに対する自分の意見もしっかりと持っています。ロシアから来ていたチェルノフさんご夫婦の世代からクセーニヤさん達の若い世代に切実に伝わっているチェルノブイリ原発事故の教訓、それは彼女達の子ども世代に受け継がれていくことでしょう。

平和を愛する国民だからこそ、この問題にはより一層真剣に取り組んでいる姿が見えます。

# 野球トーナメント MINSK CUP



左上) ミンスク対ロシア戦  
右上) ミンスクチームのベンチ。左がセチコ監督 右下) のんびりムードの観客席

近年、スポーツイベントが数多く行われている。ミンスクからのレポートです。サッカーやホッケーといったヨーロッパでも人気の競技が盛んなベラルーシですが、日本のスポーツ文化でもある野球がこの国でも広がりつつあります。

毎年、チエルノブイリ原発事故の起きた4月26日前後に《Minsk Cup》という4チーム対抗の野球トーナメントが行われています。今年も大通りプロスペクト・ポベジレイ沿いにある野球場で、4月24日〜27日の間、1993年発足のクラブ《ミンスク》(主催者)とロシア代表、ウクライナのクラブチーム《BIOTEXCOM》、ラトビア混成チームが優勝トロフィーをかけて総当たりトーナメント戦を行いました。試合前日に、ベラルーシ野球協会代表も務める《ミンスク》チーム監督のアレクサンドル・セチコ氏が野

球への思いを語ってくれました。

「体験したその日から野球のことが好きになりました。最初はこのスポーツを自国で根付かせるのに苦労しましたが、現在では私のチームも半ばプロとして様々な国際大会に出場するようになりました。ベラルーシ代表も欧州ランク23位ですが、7月にスロヴァキアで行われる東京オリンピック出場をかけた一次予選大会に出場します。そこを突破したとしても、8月に二次予選、9月の最終予選を勝ち抜かなければ日本には行けません。全力を尽くします。野球発祥の地アメリカとは微力ながら交流を深めています。ドミニカ共和国出身でメジャーリーガーのアルバート・プホルス選手の奥様はベラルーシを訪れたことがあります。彼女が言ってくれたように、ベラルーシで野球を発展させる夢を具体化することが大事だと思っています。もちろん、日本の野球団体との交流も望んでいます。明日から行われる

ようなトーナメントに日本からのチームも招待したいですね。日本の野球場に行つて試合を観戦するとともに、あの楽しい応援もぜひ体験してみたいです。できれば桜が満開の時期に訪れて、お酒を味わってみたいですね。」

翌日から始まったトーナメントでは、隣国同士のチーム戦ながら国際色豊かな大会となりました。優勝したロシア代表にはキューバやドミニカ出身の選手が揃っており、質の高いパフォーマンスを披露しました。ラトビアのチームの中にいた女性プレーヤーもバッターボックスに立ちました。最も緊張感があって面白かった試合は、大会二日目に決勝進出をかけて行われた実力拮抗のクラブ同士《ミンスク》対《BIOTEXCOM》の対戦でした。7回表まで《ミンスク》が逆転ホームランなどで4対2とリードをしていましたが、その裏の守りで2アウト二塁三塁ツーストライクから逆転スリーランを打たれてしまいました。

たった一球でムードが変わり、勝負が決まりました。日本のプロ野球で見てきた野球の醍醐味を、ミンスクでも感じた瞬間でした。選手や観戦に訪れたファン達の喜怒哀楽の表情を目の当たりにすると、本当に野球がこの国で発展する希望が湧いてきます。日本のチームがベラルーシを訪れて野球文化を伝えると同時に、この国の魅力にも触れてくれたらどんなに素晴らしいことでしょうか！大会終了後、こんな夢をアレクサンドルさんと語り合いながら球場をあとにしました。

田中仁（たなかひとし）  
ベラルーシ国立大学在学中から、フリーランスのジャーナリスト、通訳として国内外の新聞や雑誌で活躍中。ミンスク在住。



## 号次 予告

# ベラルーシ医療専門家による来日講演会

# 2

019年5月15日（水）～26日（日）までの期間、ベラルーシ共和国よりアルツール医師（ブレスト州立内分診療所所長）、ウラジーミル医師（同所・移動検診室室長）、マキシム医師（ベラルーシ共和国立立後教育医学アカデミー・内分学講座准教授）が来日され、福島県福島市および郡山市での講演会、獨協医科大学（栃木県）への表敬訪問などが行われました。来日講演の詳細は、次号のチエルノブイリ通信にて報告させていただきます。

なお今回の招聘にあたり、木村真三先生をはじめ、獨協医科大学関係者の皆さま、通訳としてご協力いただいた五代裕巳さん、いまさらきけないプロジェクト実行委員会および認定NPO法人ふくしま30年プロジェクトの皆さまに多大なご協力を賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。



左) 日本に到着したアルツール医師ら



右) 福島市での講演会。参加者から数多くの質問が寄せられた

## 5月18日(土)・福島市

日時：5月18日（土）13：30～16：30

会場：チェンバおおまち3階 多目的ホール  
（参加者61名）

- アルツール医師  
「なぜブレスト州が甲状腺検診を成功できたのか」
- ウラジーミル医師  
「移動検診の現在の動向」
- マキシム医師  
「ベラルーシにおける最新の治療と診断」

## 5月19日(日)・郡山市

日時：5月19日（日）13：30～16：30

会場：ミューカルがくと館1階 大ホール  
（参加者110名超）

上記3医師による講演のほか、三春町在住の写真家、飛田親秀氏による報告もありました。

# たくさんのご支援を ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計	5,795,975円
＊活動支援金	5,742,975円
＊のぞみ21カンパ	5,000円
＊雪だるま3号カンパ	0円
＊東日本支援カンパ	32,000円
＊おまかせカンパ	16,000円

(2019年3月～6月分の寄付内訳)

## ●口座受付寄付

青木扶美子 稲毛修子 諸隈啓子 遠藤富代 金只律子  
佐藤久美 関根敏子 高橋武三 武田孝子 田中裕一 田  
中啓 箱田裕司 原良隆 増田朋子 松井岩美 本岡眞利  
子 和田政子

### 〔都道府県別〕

- 【福島県】1名 【東京都】1名 【神奈川県】1名
- 【愛知県】1名 【滋賀県】4名 【兵庫県】24名
- 【大阪府】31名 【鳥取県】31名 【島根県】42名
- 【岡山県】25名 【広島県】94名 【山口県】141名
- 【福岡県】639名 【佐賀県】51名 【長崎県】78名
- 【熊本県】213名 【大分県】136名 【宮崎県】35名
- 【鹿児島県】124名

計1672名(匿名含む)

※振込用紙記入欄に、通信へのお名前掲載をご承諾いただいた方のみ、お名前を掲載させていただきます。

## ●月々の定額寄付(マンスリーサポーターの皆さま)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子  
井上礼子 内野千鶴子 江原健一 延壽富美 大麻卓子  
大久保伸子 大久保弘子 大崎知恵 太田昌子 大場満  
小黒慈子 落石久子 片山富美子 金山涼子 紙森優子  
亀川早苗 河上雅夫 川崎君子 川崎清美 川尻愛子  
木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚子 後藤宇企子  
財津耐代子 財津悠子 斉藤美代子 阪口香奈子 坂口  
馨子 佐々野也依 佐藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白  
浜千恵子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子  
武田孝子 田中京子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱  
加 綱脇牧子 富永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子 永尾  
ゆかり 中島幸代 中島まゆみ 永野沙智子 西首延子  
丹羽道代 納富育代 深川哲臣 福井初子 福本勅子  
藤本孝子 淵田三輝 古川恵子 松尾智恵子 松木幸美  
松永庸子 丸山さより 水本敬子 三野桂子 宮野義治  
村西美由紀 村松知子 室屋芳乃 山下澄子 山中陽子  
山本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子 渡邊真志子

計117名(匿名含む)

貴重なご寄付をお寄せいただき、どうもありがとうございます。皆さまよりお預かりしたご寄付は、チェルノブイリ被災者医療支援、福祉工房のぞみ21支援、移動検診車雪だるま3号購入の積立、東日本震災被災者支援、事務費用等にあってさせていただきます。

## 編集後記

福島市在住ルワンダ共和国出身の永遠留(とわり)マリールイズさんの講演に参加しました。心に響いた言葉は「どんなに忙しくても、少ない時間でもいいからコミュニケーションを取りましょう。特に家族とは必要不可欠です。それも楽しい話を」。振り返ると取ってるかなと反省。今日から始めようと思いました。(H・K)

## 皆さまからのメッセージ(一部抜粋)

●今年もよろしく願います。継続は力をつくづく思っています。●少しでもお役に立てればうれしいです。●地道な活動に感謝しております。●コーヒーおいしいですね。ありがとうございます。●いつもありがとうございます。●世界から原発と石炭火力発電がなくなるように働きかけたいです。

## お知らせとお願い

**振込** 用紙は毎号同封しています。これは「思い立った時にいつでも振り込みできるように、毎号同封してほしい」というご要望があったからです。決してお振込を強要するものではありません。恐れ入りますが、ご不要な方は処分をお願いいたします。

**月々** 300円から、手軽にチェルノブイリ支援!

ゆうちょ銀行で毎月26日に指定の額の募金を自動引き落とし。マンスリーサポーター募集中です。手続きは簡単。ホームページが事務局まで。

**住所** を変更された方は、事務局までお知らせください。なお今後の資料送付がご不要の場合は、お手数ですが事務局までその旨ご連絡ください。

活動の様子や通信バックナンバーなどはホームページをチェック!

チェルノブイリ 医療支援

検索

地球にやさしい再生紙と大豆インクを使用しています